

Project	地域協働専攻 地域政策グループ
16	子どもを対象にした法教育プロジェクト
メンバー	[学 生] 荒谷 泰聡 / 泉山 優花 / 藤江 あかり / 伊藤 達也 / 笠井 祐弥 / 小山田 早希 / 鎌田 帆南 / 戸川 翔真 / 中村 叶人 / 安齋 和輝 [担当教員] 伊藤 泰 / 金 鉉善
【背景】	
<p>近年は新型コロナウイルス感染症によって移動が制限されていたものの、最近はその制限が緩和され始めている。しかし地域間や国間での人の行き来が活発化する際に、両方の人が気持ちよく生活できるための「ルール」が必要になる。</p>	
【目的】	
<p>「ルール」が重要となる社会において、子どもたちにルールについて自ら興味や関心を持って接する姿勢を身につけてもらい、「法が我々と密接に関わっている」ということを知ってもらうために活動している。そのため、我々は子どもに親しみやすい「人形劇」にクイズを取り入れて、子どもに法について少しでも理解や親しみを持ってもらう。</p>	
【概要】	
<p>「子どもに法教育を行う」という趣旨のもと、まずは人形劇を行う我々がその法について学習し、理解をするところから始まる。その後は具体的な法律を用いた内容のシナリオの作成を行い、完成後はそのシナリオをもとに担当分けや小物づくり、そして練習を行う。そして最後は函館蔦屋書店の協力を得て、キッズスペースにて参加型の人形劇を実施し、子どもの法への理解を高めてもらう事を試みた。</p>	
【プロセスと成果】	
<p>前期は、まず金先生のご協力のもと我々が「そもそも法とは何か、法教育を行う際にどんなことが重要か」などといった必要不可欠な知識を教えていただいた。その後は3年生の前年度プロジェクト担当に、「人形劇を行う際のポイント」を教えていただくために、前年度に作成した台本を用いて今年度プロジェクト担当者全員と有志の前年度プロジェクト担当者合同で人形劇の練習を行った。そして6月にはその練習内容をもとに有志の前年度プロジェクト担当者と合同で一回目となる人形劇の披露を蔦屋書店のキッズスペースで実施した。</p>	
<p>前期の成果は、本番を通して様々な改善点を見つけることができたということである。有志の前年度プロジェクト担当者からは練習の際に「人形の顔は上を向きすぎないように」といったことや、「人形の動きのメリハリ」、「話すスピードの遅さ」といったことを教えていただいたが、最初のころは意識しても全てを完璧にするのは難しく、前年度プロジェクト担当者と比べて見劣りしていた。しかし、練習を通じて完成度が上がっていき、本番の前には完璧とはいかずとも前年度プロジェクト担当者と比べても見劣りしなくなった。また、今年度のプロジェクト担当者にとって初めての本番である前述の蔦屋書店での人形劇の披露ではたくさんの子ども連れの方々に来ていただき、たくさんの子ども達の反応を確認しながら進めることができた。劇の終了後には子どもや保護者の方々から「楽しかった」、「また聞きたい」などといった評価をもらい、後期への自信にも繋がった。劇の翌週には今年度のプロジェクト担当者で反省会を行い、「音声はどうだったか」や「人形の動きはどうであったか」、「子どもの反応・聞いている態度はどうだったのか」など、後期の台本作りや練習に向けて課題や良かった点を洗い出した。</p>	
<p>そして後期からは前年度の台本ではなく、今年度のプロジェクトメンバーのみで一から台本を作成することになった。最初は小学校でも劇を行う計画であったため、2つのグループに分かれてそれぞれ台本を作る予定であったが、先生の助言を受けて台本は統一することにした。その後、先生のアドバイスを得ながら子どもにも関連性の高い「落とし物」について劇を行うことに決定した。台本作成が終わった後はすぐに財布や背景などの小道具を作成し、劇で演者の担当となった人は短い時間の中で日程を調整し練習を行った。前期と比較しての練習期間は短かったが前回の発表の反省点を改善したため、完成度は前期よりも向上していった。2回目の人形劇の発表も蔦屋書店のキッズスペースを使わせていただいた。本番では事前の呼び込みに力を入れたことにより、前回より多くの集客があった。また、前回の発表と異なりマイクを使用しなかったことで、子どもたちに話を聞き取ることに集中させることができた。</p>	
<p>後期の発表では、台本作成の遅延による練習時間や劇に使う小物の作成の短さなど新たな課題が発生し</p>	

た。また、人形の細かい動きやしゃべるスピードにも課題が少し残ってしまったため、これらのことは次の代にもしっかりと伝えておきたい。しかし、子どもの参加率や反応はとても良く、先生方からも高評価であった。加えて、子ども達も前期と比較してより集中して劇を見ていたため、子どもたちに法に興味を持ってもらうための劇としては成功できたのではないかと考える。



【人形劇の練習の様子】



【劇の小道具を制作している様子】

【総括と反省・今後の課題】

前期は前年度からのシナリオや小道具等の引継ぎをスムーズに行い、前期のうちに一度人形劇を発表する機会を設けることができた。また、前年度の担当者から演技指導を受ける事で、初回の発表からクオリティの高い内容となった。後期は前期の活動から得た気づきを基に、シナリオや小道具等の制作を今年度のメンバーのみで一から行った。前期よりシナリオが出来上がった状態での練習期間は短かったが、人形劇発表の際に子どもたちから前期より多くの反応をもらうことができた。また、活動全体を通して、目的である子どもに法について少しでも理解や親しみを持ってもらうことが、劇中の問かけに対する子どもたちの反応の良さからできているように感じた。加えて、法律やルールと直接的に関係する事ではないが、人形劇を始める前に集まった子どもたちと交流し演者との距離を縮めることによって子どもたちの劇への集中力を高め、プロジェクトをさらに効果的なものにする事ができた。

今後の課題としては、人形劇のシナリオが小学生以上の子どもには簡単すぎる事が挙げられる。当初、本プロジェクトでは小学校での実演も視野に入れていたため、来年度もそのような計画がなされる事が想定される。しかし、現在のシナリオでは分かりやすくすることに重きを置いているため、小学生以上の子どもでは飽きてしまうように思われる。前年度のシナリオも含め、現在のシナリオのストックは比較的未就学児向けであるため、来年度以降シナリオ作成をする場合は今年度までと異なった年齢層へ向けたシナリオから取り掛かる事が望まれるだろう。また、一から新しいシナリオを作成しない場合には、現在あるシナリオの言い回しを小学生以上の子どもに向けたものに再調整することで、時間をかけずにこのような課題を解決できるのではないかとと思われる。

【地域からの評価】

前期の活動では、前年度までのプロジェクト担当者が築き上げた蔦屋書店との信頼関係や人形劇の実績等により今年度のプロジェクトがスムーズに進行している状態であった。

後期の活動では、前期の人形劇の発表で今年度のプロジェクト担当者にも知識だけでなく自信が付いたことによって、今年度のプロジェクト担当者が中心となりプロジェクトを進行することができた。

人形劇を上演するまでの呼び込みや子どもたちとの交流、上演後の保護者との交流などを通して、「子どもが楽しめる良い劇だった。」「友だちと劇の内容について話していた。」などという感想や意見をいただいた。

【年間スケジュール】

■前期

- 5月17日 法教育のレクチャー
- 5月18日～6月18日 劇の練習
- 6月19日 人形劇の発表

■後期

- 10月7日～11月15日 シナリオ作成
- 11月16日～12月9日 劇の練習、小道具作成
- 12月10日 人形劇の発表

